

これからの中学校における「伝統的な言語文化」の指導

筑波大学附属中学校

飯田 和明

一 戦後学習指導要領に見える古典教育観から学ぶ

新しい学習指導要領では、三領域一事項のうちの「言語事項」に変わって「伝統的な言語文化」と国語の特質に関する事項」が設定された。経年的な比較という視点から見れば、この事態を「古典重視」として捉えることができるだろう。戦後、これまでに示された学習指導要領を通覧すると、「昭和二十二年要領」には「中学校の国語教育は、古典の教育から解放されなければならない」というくだりが現れている。その「要領」では続いて、「つねにもっとも広い『ことばの生活』に着眼し、実際の社会生活に役立つ国語の力をつけることを目指さなければならない。」と記されている。すなわち当時は、戦前の〈学習内容を教化する為の古典教育〉を、〈言語生活に根ざし、言語活動に目を向ける国語教育〉とし

て改め、「解放」していこうとしていたのである。

その古典教育が、現在は重視されようとしている。それはなぜなのか。それが求められる現代とはどんな時代で、日本という国は現在どのような状況にあるのか。直接生徒に向き合い、日々教育実践に当たる私たち現場の教師は、一度そのようなことを真剣に考えておく必要があると思う（注1）。

現在にいたるまでに種々の変遷を観る学習指導要領であるが、そこにはこれからの教育の考慮に資する、「伝統的な言語文化」の指導に関するヒントも多く示されている。「昭和二十三年要領」では、「古典を分かりやすく書き換えた文章、やさしい翻訳作品などを用いることを考慮する。」「古典に関心をもたせるように書いた文章、翻訳作品、格言、故事や成語、短くてやさしい文語文などを用いることを考慮する。」といった文言が記され

ている。「昭和五十二年要領」は、「A表現」「B理解」「言語事項」として国語科の学習構成が示された学習指導要領であるが、ここでは「古典の指導については、古典に対する関心を深め、古文と漢文を理解する基礎を養うようにすること。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、短くてやさしい文語文や格言、故事や成語、親しみやすい古典の文章などを適宜用いるようにすること。」とある。「表現」と「理解」を下支えするものとしての「言語事項」という学習構造を念頭に置けば、「表現」「理解」の諸側面に関わってこの内容は適用されると言うことができる。すなわち〈各学習側面において古典を扱う〉という視界が、この時に示されていると見ることができるのである。

二 「伝統的な言語文化」に関わる実践的課題

古典教育の意義や時代的な考察については、これまでも貴重な言説が著されている。例えば時枝誠記は、「日本の敗戦が、わが国特有の伝統と精神とを賭けたところに導かれたものと考へることが、果たして事実に対する正しい認識を示すものであるかどうかは、少しく古典に親しんだものにとつては、到底、考へ得られないことであることは、戦時中、

多くの古典が、抹殺の憂き目にあつたことによつても、容易に知ることが出来ることである。」と看破した上で「古典の中に現代的意義を探索し、或は現代に通ずるものを持つと考へられる古典を選び出して、古典に対する汚名をす、がうといふ試み」を、「このやうな古典に対する態度、時勢の動向に対して、古典を利用するといふ根本的態度は、戦時中のそれと少しも異なつてゐないのである。」として批判する。さらに、「古典教育について、現代的意義といふことが、やかましく云はれるのは、一つには、今日の人々が、現代といふものに過大の評価をしてゐることから来ることであると思ふ。嘗ては、古代だけが理想であつて、現代は、墮落した時代と考へられてゐたが、今日ではその逆に、すべてを現代をもつて律しようとする。現代に合致しないものは、無価値なものと考へたがる。しかし、古典の中に、今日では忘れ去られてしまつたやうな物の感じ方、考へ方といふものを見いだすことが出来たとするならば、それは新しい世界の発見である。」と述べている。

それぞれの「現在」において、古典を継承し、その学習意義を検討しつつ、学習活動を組んでいくことの大切さについて、時枝は論じていると考えられる。(注2)

漢文教育については、古典の教材化に向け

ての貴重な指摘が、加持伸行によつて行われている。「漢文を学習する前に学習しなければならぬことがある。それは、漢文体、あるいは漢文脈の文章の学習である。たとえば、明治時代に作られた法律(刑法・民法など)の文章、いや、そういうものだけににとどまらない。明治の文学作品に、漢文体・漢文脈のものはやまほどある。……こうした漢文体・漢文脈の文章に慣れてはじめて漢文のおもしろさにつながるのである。つまり、語法的事、解釈文法的なことは、そうした漢文体・漢文脈の文章を読むときに学習し終えることができるから、いざ漢文を読むとき、生徒は解釈文法的なことはいやにならなくなる。」(注3)

小中高と漢文を学習の材として開発し、位置づけていく必要がある現在において、大変参考になる文章である。

ここでは紙幅の理由で、これ以上多方面にわたる文献の参照へと筆を進めることはしないが、戦後の学習指導要領と合わせ、先達が積み上げてこられた知見から学びつつ、これからの中学校における伝統的な言語文化に関わる実践的課題を考えていくことができると思われる。それは端的に言えば、「古典を基に、生徒自らの多様な学び、楽しみ、考察につながる教材化を図る」といった方向性である。

より具体的には、「話のおもしろさや時代背景を知ることによつて喚起される興味などから、様々な教材を提示する」、「音読や朗読、朗唱といった様々な読み方で、意味には直接触れない読みの楽しみ方を知る」、「国語辞典や漢和辞典を使って、自分から古典の文章に当たる」、「現代の文章と同じ所や違う所を自分で見つけていく」、「自分に引きつたり現代に引き比べたりできるように読み物から、ものの見方や感じ方、考え方を広げる」、「古典を学ぶことの意味を自分なりに考えてみる」といったことである。以上のような課題意識に基づいて行つた授業実践の一部を、次に紹介してみたい。

三 古典で学ぶ国語

(1) 身につけさせたい国語の力

教材化の視点を(古典を学ぶこと)によつて国語の力を高めること)におき、中学一年の授業実践に当たつた。古典を特別なものとして見るのではなく「先人の記してきた言語文化を今に受け入れることから高めることのできる国語の力がある」と意識させたいからである。「段階を踏んだ学習によつて、少量の古典文章を確実に読めるようになること」を目指すのではなく、「古典を学ぶための様々な方法を知り、それを用いて、身の回りで出

会うことのできる（古典的なもの）に自分を開き、関わることのできる姿勢」を養いたい。古典を学ぶことの意味を「身につけられる国語の力」として捉え、国語学習の一環として他の国語学習との関連を持たせながら、生徒の中に位置づけられるようにしたいと考えた。

(2) 授業における指導の工夫

前記を受け、以下の点を工夫点として念頭に置き、授業を展開していった。

- ・辞書（国語辞典や漢和辞典）などを用いて、古典的な文章（校歌など）を読んでみる。
- ・古典の文章と現代の文章との違いを挙げさせ、その違いから考える。
- ・VTRや朗読、朗詠などによって古典の世界に触れさせ、古典を受け入れる素地を作る。
- ・古典と関わることのできる継続的な時間を作る（帯単元として古典に触れる・物語や草稿に丸ごと触れさせる・暗唱課題として設定する）。
- ・国語で古典を学ぶことの意味を自ら考えさせ、これからの古典（国語）学習の視点に据える。ふだんの国語の学習との関連性とその距離感の中で、（古典につながっている器量）を育成し、（言語生活の中での古典に関わる領域）を生徒の中に醸成する。

(3) 授業の実際

① 古典的な文章を読む

身のまわりにある古典的な文章として、「校歌」を読むことから学習を始めた。本校の校歌は一九〇二年に作られた「春湯陵の花の陰 秋銘茗溪の月の下」で始まる、四番にわたる名詩である。生徒にとっては身近にありながらその内容は決して易しいものではなく、古語的な言いまわしや歴史・文学へのつながりなど多くの古典的内容を含む文章である。これを繰り返し読み、現代の言葉との違いを探し、辞書を使ってその意味を捉え、歌の解説によって内容の理解を深め、暗唱し、声に出して歌う、という流れで学習を構成していった。

この教材化の意図に沿っては、他にも「生徒手帳」「憲法前文」といった法に関わる文章など、この種の学習を成立させる貴重な素材的価値を持つ教材を探すことができるだろう。

紙幅の都合で詳述はできないが、『今昔物語集』の中の「馬盗人」の学習も行った。この文章は昭和四十年代には教科書にも盛んに取り上げられており、いずれも現代語訳で掲載されている。しかし、そこにはかなり古典的な言葉、生徒にとって「古語と現代語の間にあるような語」が見え隠れする。そういった

語の辞書引きから入り、現代語訳の仕方を比較したりすることから、徐々に古語につながっていく感覚、古い言葉をもとにして思考する経験といったものを積むことができると考えられる。さらに、二つの別の訳文を比較することから、「古語的な言葉」を巡って文章をたどり、内容についての思考を深める学習を行った。そこでは既に、「古典的な言葉」は、生徒にとって考える基点として、その意味やニュアンスがとらえられている状態になっていると考えられるのである。

② 百人一首の学習

カルタ取りも含め、小学校や家庭生活の中で「小倉百人一首」に触れている生徒は多くいると思われる。これを学習材料とし、帯単元の形で学習を進めた。音読から入るが、まずは五・七・五・七の短い区切り方で読み、次に、上の句・下の句の単位で、さらには一首全体というように、「一度に音として認識して再現できる単位」を徐々に大きくしながら、「指導者（慣れてくれば、ある生徒）↓生徒全体」のおうむ返し形で、繰り返し声を出して読ませた。

次いでビデオ教材を用いて、音読練習した歌を関連映像で観て、朗読を聴きながら、和歌という文芸をイメージの世界につなげられるようにした。その際、指導者がそれぞれの

歌にまつわる解説を行ったり、生徒にイメージ・歌意を思い浮かべさせながら、上の句・下の句に分けて筆写するという学習も行った。

最後には「まとめ読み」を行った。これは、「これまで学んできた内容をできるだけ自分の発する声に込めて、音読しよう」という読みである。ここでの音読には、これまでの読み方との違いが生徒側に現れていた。指示はされていないのに、生徒は速度を落として読んだのである。歌を読み慣れ、暗唱を目指す段階では、早口だったり、またリズムミカルに読みながら、それを一種の学習の活力にしていたが、この段階では「調べ」を持ってゆっくりとした読み方がなされる「歌の詠み」に、自ずと接近している様子であった。時間をゆったりと流し、その中で短い文言に込められた思いや情景を浮かべる……。そういう学習の時間を持つことも、今、大切なのではないだろうか。

四 伝統的な文化を大切にすることは

最後に、広く「伝統的な文化を大切にすることとはどういうことか」と考えてみる。先日あるテレビ番組で、著名な歌舞伎役者さんが、卒業した母校でのエピソードを紹介しながら、楽しそうに高校生活について語っていら

した。そこには氏が過ごした（どちらかといえば破天荒な？）学校生活への愛着、誇りのようなものが底流していることが感じられた。

今、目の前にいる在校生の生徒、そして私たち教員は、この学校のどんなところに拠り所を持ち、この学校を離れた後もなおどんなことを大切にしたいと思うのだろうか。生徒の「成績」や「進路」の宣伝、時には喧伝によって評判になったと見えるその学校の姿を、そういうものと感じ、再び愛着を持って、帰ることのできる母校と思うのだろうか。むしろ、自分たちでつくった「文化」、それを残してきたという自負が、卒業後、また異動後何年経っても、懐かしくその学校を思い出す際の核になっているのではないだろうか。そういう「文化」を、私たち教員は本当に生徒とつくり出すことができているか、現在勤務する学校の文化と言えるものは何なのか。まずは自分の学校を大切にすることができるが、日本の伝統文化を大切にすることの素地になるのではないか。「伝統的な言語文化」の指導を考えるにあたり、そのようなことに思いを巡らせた次第である。

注1 この詳細や、本稿で十分に取り扱えていない件については、次の文献を参考にしたい。「国語科における小中高

一貫カリキュラムに関する研究」古典分野を例にして「筑波大学附属中学校国語科（二〇〇八）『筑波大学附属中学校「研究紀要」第60号』所収
時枝誠記（一九五六）「国語教育における古典教材の意義について」東京大学国語国文学会編『国語と国文学』Vol. 33 No. 4 至文堂

注3 加地伸行（一九八七）「漢文なんて型だけ」か『月刊国語教育』No. 71
所収 東京法令出版

いいた かずあき 筑波大学附属中学校教諭。教育の歴史に学びながら、「教材化」をキーワードにした国語科授業実践開発、理論的な研究に取り組んでいる。